神戸淡路大震災 1995.1.17.の特集「鉄のものづくり」の記事に目が留まりました

＜経済小説の迫真　同時代の光と影＞（３３）　神戸新聞　１月１５日夕刊特集　より転記

3. 震災復興に重なる　町工場の底力　小関智弘著「春は鉄までが匂った」

心に響いたものつくりの言葉「ものつくりの魂には　永久に自足するということがない　」

「消費に特化した町は どこか薄っぺらい。強いのは生産機能のある町。多様だからこそ変化に対応できる」

新聞記事の中にある 生きた言葉の数々が懐かしい　衰退する技術立国日本に必要なもの

ものつくりの魂「現場主義・知識と知恵　技能・技量」への理解

街歩きの途中　現場の匂いがなつかしく工場の匂いに足を止める 2025. 1. 17.　Mutsu Nakanishi

経済小説の迫真
―同時代の光と影―
ものつくりの魂には永久に自足するということがない
震災復興に重なる 町工場の底力
小関智弘著 春は鉄までが匂った

工場で取材する小関智弘さん。
生産にまつわるエピソードを
丁寧に聞き取る
＝２００７年８月、大阪市都島区

詩的なタイトルに惹かれてこの本を手に取ったときのことを思い出す。
旋盤工として働きながら、その哀歓を書き続けた職人作家の世界がそこにあった。町工場に生きる人々を取り上げたルポの体裁だが、エピソードをすくい上げるまなざしと作家の想像力が相まって、ものづくりに打ち込む人々を主人公にした私小説のような味わいを醸し出している。

この本を手に兵庫運河（神戸市兵庫区）沿いに立つ「ものづくり工場」を訪ねた。鉄骨造りの建物が計４棟。阪神・淡路大震災から３年後の１９９８年、神戸市が建てた日本最大級の公営賃貸工場だ。当初の神戸市復興支援工場、ものづくり復興工場から現名称に名を変え、現在、中小零細１００社余りが居を構える。

「金属を削る、磨く。革を裁つ、縫う」ここに来れば町工場ならではの音や匂いを感じ取ることができる。多くの人が震災で自宅や工場を失った。いずれも職住近接か職住一致だったから、被害は暮らしを大きく揺さぶった。

被災後は同市西区などにできた仮設工場で急場をしのぎつつ、ここにたどりついた人もいる。どこかの町を歩いていて、小さな工場をみかけたら、ちょっと立ちどまって、そこで飛び散っている火花の色を心に写してみてほしい。その火花の先の微妙な色の変化や、花の散り具合にも心をかけて、鉄や鋼でものを作っている人がいることを、そんな人たちの悲喜こもごも、少しでも語り得たら、わたしはうれしい。

〈本文引用、抜粋・省略。以下同〉

■ 職人の「暗黙知」

小関智弘は東京都大田区で半世紀にわたって旋盤工として働いた。
働きながら同人誌「塩分」で小説の腕を磨いた。
「文学少年の尻尾を引きずっていたわたしは、鉄を削るという労働の初体験とその仕事をめぐる
さまざまな人間模様を、いつの日か小説に書いてみたいという思いを抱きはじめた」
小関「働きながら書く人の文章教室」）。

経済学や経済ジャーナリズムが産業構造を上から見ているのであれば、下から、町工場から日本経済を見る視角で小関は作品を発表していく。
経済社会は高度成長からバブル崩壊をへてＩＴ（情報技術）を軸に大きく変容していった。しかし、どれだけ IT が発達しても、熟練の職人が持つ暗黙知、豊かな世界を完全にマニュアル化することはできない。

「技能は単なる手業（てわざ）ではなく、難局を乗り越える問題解決能力だ」。小関の言葉がよみがえる。
それを支えるのは、町工場から大工場までさまざまな現場に宿る、ものづくりの魂にほかならない。

商魂なら利益をあげることで自己完結してゆくだろうけれど、
ものつくりの魂には永久に自足するということがないでしょう。
現実とのズレを、どう克服するのか。わたしは聞いた。
設計の堀沢さんは熱っぽく語った。小さな工場でよい機械を生み出すためには、たくさんの工場の協力が必要だ。
電気関係、震動対策、機械加工の精度対策と太い指を折りながら、
「いいものを作ろうとする仲間が集まれば、きっと出来る」。
ものづくりの魂は、決して自足してはいない。

■　鋼の腹のなかでー

2008 年９月、ものづくり工場（当時はものづくり復興工場）の１０周年の会があり、小関が講演に立った。
大震災で壊滅的な打撃を受けた神戸の惨状と、東京大空襲で灰じんに帰した東京・大森の様子を重ねつつ話した。
「どちらも見事に復興を果たしたのは、ものづくりの底力があったから」。
地域に根差した町工場が集積し、多彩な製品を作り出す。
「消費に特化した町は どこか薄っぺらい。強いのは生産機能のある町。多様だからこそ変化に対応できる」
工場の取材に同行したことがある。
ラインに入り、穏やかな表情で話に聞き入り、メモ帳に書き込む。温顔、決して高ぶらない。
旋盤工として長く鉄と向き合ってきた経験からか、不思議な信頼感が生まれる。
「現場でしか聞けない言葉があるんだよね」。
ゆっくりと確かな足取りで人生を歩いてきた職人の姿がそこにあった。

著書にサインをお願いした。「鋼の腹のなかで考える」
円安、原材料高、後継者難…。ものづくりの先行きについて悲観論が語られて久しい。
だからこそ、机上ではなく、鋼の腹の中で考えたい。
表題作「春はー」のタイトルの意味を語ってもらおう。
前の晩に雨に打たれた屋外の鉄屑（てつくず）が、赤錆（さ）びながら太陽を浴びれば、
酸化熱を発しながら湯気を立てる。
それが甘酸っぱく匂うのは工場の人間なら誰でも知っている。（敬称略）

（特別編集委員・加藤正文）

【こせき・ともひろ】１９３３年東京都生まれ。５１年から２００２年まで東京都大田区内の町工場で旋盤工として働く。小説、ノンフィクション作品を多数発表。「大森界隈（かいわい）職人往来」で第８回日本ノンフィクション賞。「ものづくりに生きる」「仕事が人をつくる」など著書多数。
本作品は１９７９年７月刊。ちくま文庫、現代教養文庫

知らなかった本　今 図書館貸出し　Waiting 中　　神戸新聞　2025 年 1 月 14 日夕刊特集より　転記